

AR HOPE TOUR

in Sendai / 3.12 sat in Tagajo / 3.26 sat

AR HOPE TOURの目指すもの

・コンテンツ体験による「防災力向上」や「震災記憶の継承」

震災体験を風化させないために、そして今後起こりうる災害に備えるための体験を提供

・被災地から創出するビジネス

dmpとソニーグループの「技」と東北大学の「知」の融合により、観光や防災教育の新たなモデルを被災地から生み出す。

・地域活性化への寄与

地域での防災力向上および震災記憶の伝承に貢献、観光活用による交流人口の拡大と、それともなう経済活動への寄与

本ツアーの概要

東日本大震災の被災地域である仙台市、多賀城市において、ウェアラブルデバイス(※)等、さまざまなデバイスを用い、AR(拡張現実)や映像・音声等複合コンテンツを用い臨場感に長けた震災疑似体験をできるようなソリューションを産学連携で構築しています。本ツアーはソリューションの実証実験を兼ねています。

震災アーカイブデータを活用し、復興過程の被災地と震災当時の様子を対比させるAR表示や、津波の高さの体感、証言記録音声などを組み合わせたコンテンツを複合的に体験いただきます。

※ウェアラブルデバイス:身につけてつかう電子デバイスの総称。メガネ型、腕時計型、リング型などのタイプが現存する。

実施背景

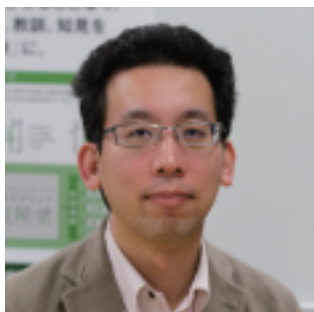
2015年3月の国連防災世界会議において、被災地AR観光のアイデアを出した宮城県農業高等学校の生徒とともに、「NATORI AR HOPE TOUR」と題し、AR(拡張現実)グラスを活用した被災地観光の実証実験を国内外の防災減災関係者向けに実施。

その結果、震災状況を疑似体験するツールとして有用性が確認でき、実施後の反響でニーズを感じつつも、課題も散見された。

その課題に対する解決策をもったパートナーと協力体制を構築。

内容もスケールアップし、新たなフィールドでの実証実験を行うものである。

実証実験に寄せて



柴山 明寛 Shibayama Akihiro

東北大学災害科学国際研究所
情報管理・社会連携部門
災害アーカイブ研究分野 准教授

震災そして津波を経験した人は、二度と同じ被災を繰り返さない。しかしながら、経験していない人は、同じよう行動することは難しい。私達は震災の経験を後世へ残し、防災力を向上するために新たな技術でチャレンジをします。



佐藤 慧 Kei Sato

株式会社ディー・エム・ビー
プランナー/ディレクター

昨年のツアーは手探り状態でしたが、多くの反響をいただきました。今年度は高校生たちのアイデアをより高い次元に引き上げる協力体制を構築できました。ただの実証実験で終わらず、被災地から新しい価値を生み出すことに挑戦してまいります。



加藤 圭一 Keiichi Kato

ソニー株式会社
UX・マーケティング本部
マーケティングマネジャー

弊社の「外部企業・開発者との共創マーケティング活動」においてSmartEyeglassというソニーの技術・製品が本件の具現化に貢献できること、また、昨年に続きdmp様、今回は新たに東北大学様とビジネス共創の機会を頂いたことに感謝致します。



山根 正博 Masahiro Yamane

宮城県農業高等学校 実習助手

3年前から生徒たちと被災地語り部ツアーを実践してきました。復興過程で街の姿が変わることで、津波の恐ろしさを伝えることが難しくなりました。そこで、ARグラスを使用した語り部ツアーを考案しましたが、今回、大きな取組として発展していて驚きと喜びを感じています。



災害科学国際研究所
IRIDeS
International Research Institute of Disaster Science

応募方法等詳細はWeb サイトをご確認ください。

<http://www.dmp.co.jp/ar-hope-tour/>

問い合わせ先 株式会社ディー・エム・ビー ar-hope-tour@dmp.co.jp / 022-214-2772 (佐藤)



協力：ソニー株式会社